

高等学校における不登校支援の手がかりを求めて

朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』にみる高校生の心理

内山佐代子（和光大学大学院）

【不登校をめぐる諸問題】

近年、高校進学率は97.8%（2008年）にもなっているが、同年文科省の統計によると、不登校生徒の割合は53.024人（1.58%）である。この数字は2004年の67.500人（1.82%）をピークに減少してきているとはいえ、問題なのはそのうち18.459人（34.8%）の生徒が中途退学になっているということである。高等学校は義務教育ではない。学校へ行かない選択もちろんある。自己責任ということで担任は進路変更を勧めたりすることもある。学校組織としても小・中学校のような支援体制はないのが現状である。それでも実際に現場では、スクールカウンセラーとの連携や、保健室登校などで何とか進級できるように学習面でも精神面でもサポートしようと働きかけるが、効果のある方法をなかなか見つけ出せずにいる。不登校になるきっかけは様々であるが、抱えている問題の本質は同じなのではないだろうか。つまり、青年期の課題としっかり向き合うことができずにいる。そのあたりを人間の発達過程において、うまく次の段階に移行できない問題として捉えることに視点を置いて、教員の立場に立って高校生の不登校支援を考えてみようと思っている。

では、青年期の課題とは何であろうか。エリクソンのいう心理社会的発達段階の青年期においては、それ以前に信頼されていた自己の斉一性と連続性が再び問題となり、この段階における危機を同一性の拡散であるとしている。岡本(1999)はこの同一性の拡散の臨床例を6つあげている。①自意識の過剰 ②選択の回避と麻痺 ③対人的距離の失調 ④時間的展望の拡散 ⑤勤勉さの拡散 ⑥否定的アイデンティティの選択、であるが、これら臨床例のひとつの現象として不登校が存在するのだと思う。

一方で、ほとんどの高校生は人生で一番輝いていると思えるぐらい高校生活を十分に楽しんでいる。彼らには彼らなりの生活様式があり、友人関係のルールがあり、思考回路があり、そのような中で大田（1979）のいう第二の自我を形成していく。それは、自己と対峙し、自分はどのような自分になろうとしているのかを常に考え続ける内面の作業である。従って高校生特有の心理を知ることは、問題を抱えた生徒達の精神的なサポートへの糸口を見つけるために必要なことではないかと思う。

高校生にとって友人の存在は非常に重要なものとなる。また、青年期は心理的離乳の時期ともいわれるように、親から精神的な自立を試みようとする。高校へ入学すると、それまでにはなかった自由さを感じるのは、依存の対象が親から友人へ変化することにも関係していると思う。岡田（1992）は緊密で深い情緒的関係を持つ友人関係は、青年の身体的成熟と精神的未熟のアンバランスから来る情緒的な不安定さの克服や心理的離乳を促すと言っている。しかし、80年代半ばごろから友人関係の変化がみられている。千石（1985）

は、一人になることを極端に恐れる、硬い話題や問題を避けてとりあえず楽しければよいと考える、互いに傷つけることを恐れ、相手から一歩引いたところでしか関わろうとしない、と指摘している。それは、現場でも感じることで、同じグループの友人には最大限の気の使い方だが、それ以外の友人は、同じクラスでも名前も覚えていない無関心さである。つまり現代の高校生は友人関係は、本物を築くのが難しいということではないだろうか。

【朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』について】

本研究で取り上げた「桐島、部活やめるってよ」は作者の朝井リョウが2009年第22回小説すばる新人賞を受賞した作品で、2010年2月に発行された。5人の高校生の現在をオムニバス形式で表している。桐島がバレーボール部を辞めた。理由は本当のところはわからない。桐島が一人称として登場する場面はない。彼の周辺の人物が憶測で語り、辞めたことによる余波が直接、間接的に周囲に及ぶ。

ここでは5人の高校2年生がオムニバス形式で登場し、それぞれが自分のことを語る。彼らは、ある高等学校の同学年の生徒たちである。そこでは何か特別な出来事が起こるわけではなく、普通の高校生活の日常を切り取っただけのものである。おそらく、すべての高校生が経験しているようなありふれたことを綴っている。それがなぜこんなにも輝きを放ち、いとおしく、切なさに満ちているのだろうか。そして彼らは確実に成長しているのである。読者は自分の高校時代を懐かしく思い出すことであろう。作者の朝井リョウは1989年生まれの子供であるから、自分の高校時代を懐かしんで書いたというよりは、高校生活まっただ中であって、5人の日常生活を表した。もちろん作者は一人であるが、5人の手記として捉え、それぞれが語る言葉の中に、現実の問題を浮き彫りにしたい。そこには現代の生きた高校生の言葉が息づいている。それぞれの日常で起こることと向き合いながら成長している姿が表現されている。

高校生の不登校支援を考えるにあたって筆者がキーワードとしていることは、「関係性」と「居場所」である。従って本書からはそれに関連していると思われる3つの重要な点を提起した。まず、ひとつは部活動である。登場する5人はみんなそれぞれのスタンスで、部活動に関わっている。次に、友人間の階層構造、これは誰が決めたわけでもないが、いつの間にか2つの層に分けられ、そして、ひとたび下のグループに位置づけられると、もうそこからは出られず、常に上に対して劣等感のようなものを持つてしまうのである。そしてもう一つは何らかの自分自身の問題を持っていること、5人はみな前向きに高校生活を送っているし、何か大きな失敗をしでかしたわけでもなく、まわりから見たら、順調な毎日であるが、人には言えない悩みを抱えていることである。

【本研究の目的】

本研究ではテキストマイニングを用いて、上述した(1)部活動(2)階層構造(ランク)(3)悩みの3点に関わりそうな言葉を抽出し、分析することで、高校生の求めているものが何であるのかを明らかにする。そして、高校生が学校生活のどのような部分で満たされれば、青年期の課題や危機を乗り越えることができるのかへの示唆を得ることが本研究の

目的である。

【方 法】

テキストマイニングによる分析は（１）基本情報（２）単語頻度解析（３）対応バブル分析（４）注目分析（５）係り受け頻度解析を行った。

（１）基本情報

テキストの基本的な情報である。

（２）単語頻度解析

テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることによる分析である。全体と５人の文章それぞれについて解析を行った。

（３）対応バブル分析

テキスト中の言葉や表現と属性の関係を２次元または３次元空間上に分布させることにより、言葉を介した属性の分布をみるものである。全体のものについて行った。

（４）注目分析

ある言葉がテキスト中でどのような使われ方をしているのかをみるものである。

（５）係り受け頻度解析

テキストに出現する係り受け表現の出現回数をカウントすることによる分析である。

【結 果】

表１は基本情報を示す。語彙の豊富さを示す指標であるタイプ・トークン比（金、2009）は小泉 0.40、沢島 0.45、前田 0.40、宮部 0.38、菊池 0.43、全体では 0.24 であった。

図１は全体の単語頻度解析の名詞についてのグラフである。表２は５人のそれぞれの単語頻度解析の名詞、表３は形容詞を示す。

表 1 全体の基本情報

	項目	値
1	総行数	5
2	平均行長(文字数)	10261.6
3	総文数	2794
4	平均文長(文字数)	18.4
5	述べ単語数	20015
6	単語種別数	4830

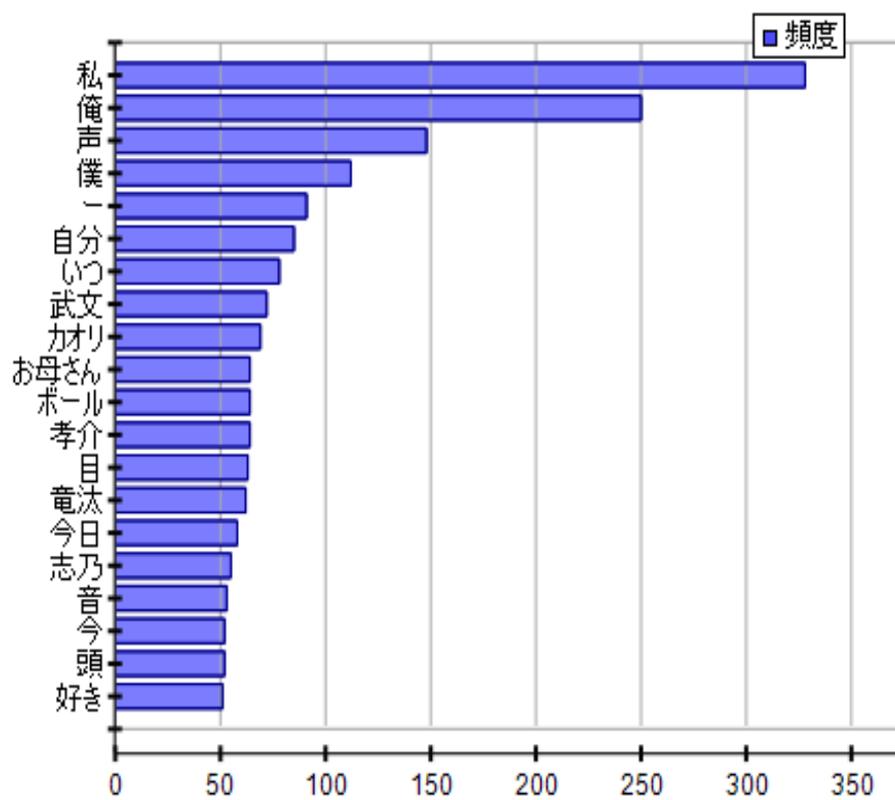


図1 全体の単語頻度解析

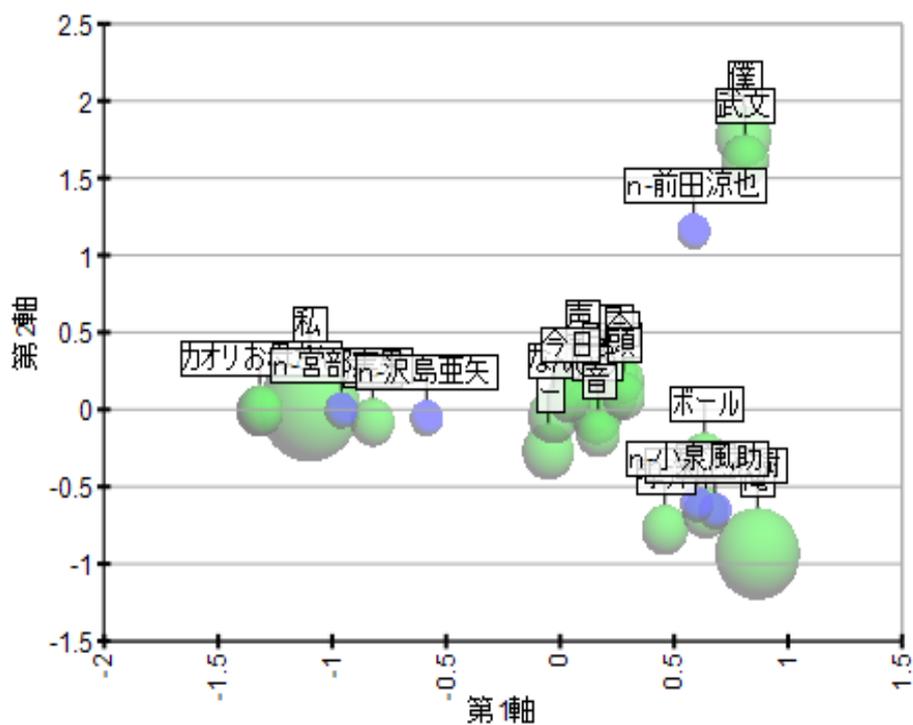


図2 全体の対応バブル分析

表2 5人の単語頻度解析 (名詞)

a)				b)				c)			
単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度	
1	俺	名詞	130	1	私	名詞	226	1	俺	名詞	115
2	竜汰	名詞	47	2	お母さん	名詞	64	2	ボール	名詞	36
3	沙奈	名詞	26	3	声	名詞	37	3	声	名詞	27
4	声	名詞	22	4	お父さん	名詞	35	4	コート	名詞	23
5	映画部	名詞	20	5	梨紗	名詞	32	5	自分	名詞	22
6	友弘	名詞	20	6	ー	名詞	26	6	音	名詞	19
7	キャプテン	名詞	19	7	母	名詞	23	7	ー	名詞	19
8	目	名詞	17	8	自分	名詞	18	8	気持ち	名詞	14
9	野球部	名詞	16	9	顔	名詞	17	9	テーブル	名詞	13
10	カバン	名詞	15	10	子	名詞	14	10	体	名詞	13
11	自分	名詞	13	11	手	名詞	14	11	頭	名詞	13
12	肩	名詞	12	12	家	名詞	13	12	言葉	名詞	12
13	前田	名詞	12	13	カレー	名詞	12	13	相手チーム	名詞	12
14	ふたり	名詞	11	14	大声	名詞	11	14	体育館	名詞	12
15	今	名詞	11	15	背中	名詞	11	15	顧問	名詞	11
16	背中	名詞	11	16	目	名詞	11	16	部室	名詞	11
17	俺達	名詞	10	17	メニュー	名詞	10	17	キャプテン	名詞	10
18	言葉	名詞	10	18	姿	名詞	10	18	ネット	名詞	10
19	真っ白	名詞	10	19	人	名詞	10	19	ボール	名詞	10
20	体育館	名詞	10	20	男子	名詞	10	20	マネー	名詞	10

d)				e)			
単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度	
1	僕	名詞	112	1	私	名詞	90
2	声	名詞	44	2	声	名詞	18
3	かすみ	名詞	39	3	くちびる	名詞	17
4	僕ら	名詞	31	4	ー	名詞	16
5	自分	名詞	24	5	音	名詞	15
6	映画	名詞	22	6	石ころ	名詞	15
7	人	名詞	21	7	風	名詞	14
8	目	名詞	21	8	顧問	名詞	12
9	男子	名詞	17	9	髪の毛	名詞	12
10	頭	名詞	15	10	心	名詞	11
11	映画部	名詞	14	11	竜汰	名詞	10
12	クラス	名詞	13	12	グラウンド	名詞	9
13	ボール	名詞	13	13	バスケットゴール	名詞	9
14	女子	名詞	13	14	私達	名詞	9
15	体育	名詞	13	15	男子	名詞	9
16	カメラ	名詞	12	16	目	名詞	9
17	世界	名詞	12	17	イヤホン	名詞	8
18	体育館	名詞	12	18	サックス	名詞	8
19	グラウンド	名詞	11	19	チョコレート	名詞	8
20	チーム	名詞	11	20	つまさき	名詞	8

表3 5人の単語頻度解析 (形容詞)

a)				b)				c)			
単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度	
1	良い	形容詞	20	1	良い	形容詞	25	1	うまい	形容詞	14
2	重い	形容詞	18	2	可愛い	形容詞	13	2	低い	形容詞	11
3	うまい	形容詞	8	3	やさしい	形容詞	9	3	良い	形容詞	10
4	黒い	形容詞	7	4	愛しい	形容詞	6	4	柔かい	形容詞	9
5	可愛い	形容詞	6	5	円い	形容詞	6	5	早い	形容詞	8
6	短い	形容詞	6	6	辛い	形容詞	6	6	白い	形容詞	8
7	かっこいい	形容詞	4	7	多い	形容詞	6	7	大きい	形容詞	7
8	小さい	形容詞	4	8	夕夕い	形容詞	5	8	寒い	形容詞	6
9	大きい	形容詞	4	9	嬉しい	形容詞	5	9	嬉しい	形容詞	6
10	暗い	形容詞	3	10	強い	形容詞	5	10	高い	形容詞	6
11	楽しい	形容詞	3	11	細い	形容詞	5	11	きつい	形容詞	5
12	嬉しい	形容詞	3	12	小さい	形容詞	5	12	鋭い	形容詞	4
13	強い	形容詞	3	13	短い	形容詞	5	13	気持ちいい	形容詞	4
14	広い	形容詞	3	14	欲しい	形容詞	5	14	臭い	形容詞	4
15	細い	形容詞	3	15	柔かい	形容詞	4	15	悪い	形容詞	3
16	深い	形容詞	3	16	早い	形容詞	4	16	汚い	形容詞	3
17	早い	形容詞	3	17	からい	形容詞	3	17	重い	形容詞	3
18	白い	形容詞	3	18	きつい	形容詞	3	18	凄い	形容詞	3
19	夕夕い	形容詞	2	19	ゆんどく	形容詞	3	19	正しい	形容詞	3
20	夕夕い+?	形容詞	2	20	寒い	形容詞	3	20	遅い	形容詞	3

d)				e)			
単語	品詞	頻度		単語	品詞	頻度	
1	良い	形容詞	18	1	可愛い	形容詞	14
2	恥しい	形容詞	8	2	良い	形容詞	9
3	かっこいい	形容詞	7	3	長い	形容詞	8
4	早い	形容詞	7	4	痛い	形容詞	7
5	可愛い	形容詞	6	5	かっこいい	形容詞	5
6	広い	形容詞	6	6	早い	形容詞	5
7	楽しい	形容詞	5	7	遅い	形容詞	5
8	大きい	形容詞	5	8	白い	形容詞	5
9	美しい	形容詞	5	9	短い	形容詞	4
10	高い	形容詞	4	10	茶色い	形容詞	4
11	細い	形容詞	4	11	うまい	形容詞	3
12	小さい	形容詞	4	12	やさしい	形容詞	3
13	凄い	形容詞	4	13	暗い	形容詞	3
14	短い	形容詞	4	14	温い	形容詞	3
15	うまい	形容詞	3	15	寒い	形容詞	3
16	もの凄い	形容詞	3	16	甘い	形容詞	3
17	やさしい	形容詞	3	17	強い	形容詞	3
18	やばい	形容詞	3	18	近い	形容詞	3
19	悪い	形容詞	3	19	細い	形容詞	3
20	黄いろい	形容詞	3	20	小さい	形容詞	3

まず、全体の単語頻度解析を図1に示す。高校生と言え、どこか現実離れをしていて、地に足がついていないように思われる。彼らは義務教育を終え、しかし、まだ将来の問題と真剣に取り組むまでには余裕がある、という状況の中で、とても自由度がある、何でも楽しんでいるように見えるが、その言葉の中に「自由」は出てこないし、楽しさを表現する言葉もない。これは友人関係や、勉強、部活動、進路問題などに追われつづけ、周囲で感じるほどのんきではないということかもしれない。また、青年期になってその関心が友人に向かうというのは、宮部以外に「お母さん」やその他家族の呼称が頻度解析であがってきたものがなく（表2）、これは家族中心から友人中心の生活になっていることを表していると思う。

5人の個別の手記に、その名詞と形容詞の単語頻度解析（表2・表3）で上位になった言葉を選び、テーマとした。小泉風助は「背中」（表2c）、沢島亜矢は「痛い」（表3e）、前田涼也は「僕ら」（表2d）、宮部実果は「お母さん」（表2b）、そして菊池宏樹は「重い」（表3a）、である。これらの言葉を中心に5人の高校生活とそこに潜む思いを分析する。

（1）小泉風助

小泉風助は桐島がやめたバレーボール部の部員である。桐島がやめたことでリベロとして試合に出場することができた。しかし、なぜか桐島の背中を思い浮かべてしまう。ランニングの時にいつも自分の前にあった背中、ゼッケンにキャプテンマークの白いテープが貼ってある背中である。始めは桐島がやめたことで彼はうれしかったが、やがて彼が戻ってくるのを望んでいる。その背中は小泉にとってあこがれであり目標であり障害でもあったが、その桐島の「背中」は小泉の存在に支えられ、安心して前を走っていたのであった。小泉は「背中」が消えたことで初めてその意味がわかったのである。「桐島にはおれしか言えない意見があって、桐島はその意見をいつも聞きに来ていた。」のである。桐島のいない試合に出場したことで、小泉はようやく自分の役割を知った。

（2）沢島亜矢

沢島亜矢はブラスバンド部の部長である。いつも他の部員より早く音楽室に行き、窓を開けて外に向かって楽器を吹いている。そこからグラウンドの古いバスケットゴールが見える。そこにはいつもゴールを外す、くしゃくしゃパーマがいる。彼女は「痛い」のである。そして彼女の痛みは形容詞の「痛い」だけではなく動詞の「痛む」も併せ持つ。これは、つま先の痛みと重なって、片思いの恋をしている彼女の胸の切なさや、友達に自分のその気持ちを言えないでウソをついていることへの痛みである。しかし、彼女はそんな自分の思いに浸っている暇はない。コンクールを3日後に控え、部長の責任を果たすべく「泣くな、私」と言って痛みを耐えるのである。

（3）前田涼也

前田涼也は映画部に所属している。そして高校生映画コンクールで特別賞をもらい、全校生徒の前で表象されたが、映画部は校内であまり認識されていない。さらに、彼はランク（階層構造）の「下」にいることを自覚している。そしていつも「上」にいる男子のか

っこよさは、何なんだろうと思っている。彼は自分が下にいることを認めてはいるが卑屈にはなっていない。それは「僕らには心から好きなものがある。それを語り合う時には、かっこいい制服の着方だって、体育のサッカーだって女子のバカにした笑い声だって全て消えて、世界が色を持つ」と言っているように、彼には「僕ら」といえる友人の武文がいるからである。そして「世界で一番最高の瞬間を、映像として、僕らが切り取る。」と自信に満ちあふれている。「僕ら」のような一人称複数が頻度解析で上位に出てくるのは前田以外にいない。たとえば菊池は「上」にいて、いつも仲間と一緒に放課後バスケットボールで遊んでいるが、「俺」と並んで複数になるような友達はいないのである。前田は、中学時代、共に熱く映画について語りあい、今は「上」にいるかすみへの思いを、最高の映像とともに伝えようと、カメラのレンズをのぞくのである。

(4) 宮部実果

宮部実果は5人の中で唯一「お母さん」という言葉を使っている。彼女の父親は彼女が9歳の時に「お母さん」と再婚した。そして同時に十一歳の姉カオリができた。やがて実果は姉と同じ高校に進学し、姉が四番で活躍しているソフトボール部に入部した。ところがカオリが高3の冬、父親とカオリは突然の事故であっけなくいなくなってしまったのである。母親はそれが原因で心の病になってしまい、実果をカオリだと思いこみ、カオリの好きなカレーライスを毎晩作ろうとするのである。実果は自分を見てくれない母親が悲しく、辛かった。学校では、部活で四番をとろうと熱心に練習する。そして友人関係では、女子の付き合いに疑問を持ちつつも、なんとなくそれに自分を合わせたりして、そうすることで自分自身と向き合っていこうとしている。やがて、実果は自分も「お母さん」のことをきちんと見ていなかったことに気づき、改めて「お母さん」と向き合っていこうと思うのである。

(5) 菊池宏樹

菊池のカバンは「重い」。彼は、「上」に所属する人間を代表するような人物である。「上」のランクとは、何をやるにもかっこよく目立ち、女子からは注目され、自分たちも十分それを意識している集団である。菊池にはとても可愛い彼女がいる。彼女の両親が留守の時には家に誘われる。運動もできる。実際、野球部の練習をさぼっていてもキャプテンが試合にだけは来てほしいと懇願しに来るくらいである。それでも最近、彼はイライラしている。それが何なのか自分でもわからない。練習はサボるが、野球部指定のカバンは「重い」。カバンの重さは彼の心の重さであろう。菊池は同じクラスだが「下」に属する映画部の前田とは口をきいたこともない。しかし、彼がいつも同じ映画部の武文と熱心に話しこみ、自主製作映画で賞ももらい、新作に向けて「重い」カメラを担ぎながら校内を飛び回り撮影している姿に、どこか羨ましささえ覚えるのである。前田にとってのカメラの「重さ」は充実感を感じさせる重さである。菊池は自分の生活を振り返る。部活をさぼって彼女の家に行こうとしている自分、映画部をバカにしたような彼女の言葉、桐島のバレーボールに対する真摯な姿勢を茶化す友達、学校の練習だけでは足りず、コンクール前にカラオケ

店に楽器をもちこみ店員に追い出されたブラスバンド部、進路希望調査、体育の時間サッカーの試合でミスをして肩を落として歩いている映画部員に、「気にすんなよ」って声をかけるのをためらってしまった自分、練習をしないのに毎日「重い」野球部指定のカバンを持ってくる自分、浮かんでは消え、浮かんでは消え、浮かんでは消えなくなっていた。野球部のキャプテンは、明日試合なんだとだけ言った。もう気にするな、と言ってカバンが食い込む肩に手を置いた。そんな「重い」カバンで登校しなくていいんだよ、というキャプテンの思いが伝わってきた。菊池は「重い」カバンの意味を考えた。そして気付いたのだ。本気でやって、何もできない自分を知ることが一番怖かったんだということに。帰りかけていた菊池は、校門とは逆方向にある野球のグラウンドに向かって歩き始めた。もう彼はカバンを「重い」と思うことはないだろう。

(6) 5人の比較

次に、対応バブル分析で、5人の使用した言葉からお互いの距離感を分析した結果を図2に示す。これによると、宮部と沢島は共に女子ということもあり、接近している。また、菊池と小泉もかなり接近している。これは二人とも運動部という彼らの生活にとってかなりの比重を占めているところで共通部分があるからだと思う。しかし、前田は他の4人とは異なる場所に位置している。これは彼の「下」のランクにおける意識を持ちつつも、他二人の男子よりは自己肯定感をもっていることを反映していることを示すような図である。

以上のように、5人それぞれの章における彼らの言動・心理面での違いがテキストマイニングにより明らかになった。

【考 察】

今回テキストマイニングの手法を用いて、高校生をめぐる小説を分析することによって、ただ読み流すだけではイメージでしかとらえられないことを、単語頻度解析で上位の言葉を注目することで一人ひとりの抱く思いをくっきりと浮かび上がらせることができたと思う。

本研究の目的にあげた(1)部活動は、高等学校内における居場所として、その教育的機能はもちろんだが、生徒にとっては心の秘密基地的な場所でもあり、他の空間から切り離されて、誰にも言えない自分の気持ちと向き合える場所にもなりうる。高校生にとっては生徒としての「公」の自分とプライベートな自分とが混ざり合うところである。熊谷(2010)はその勤務校における「クマ部屋」で不登校や休学中の生徒も受け入れ、学習指導をすると同時に、本人にとってストレスの少ない部活動を行うことも認めている。ここから言えることは、悩みを抱えながらも放課後に行く場所(部活)があるということはとても重要であるということである。悩みをぶつけ分かち合える友達がいて、目標に向かって厳しい練習を繰り返す、そこで頼りにされたりすることは確かに荷が重い、それが自分へのエネルギー源になっている、そんな居場所の存在が必要なのである。そして、そこで人との関係性を築こうとする。

梅原（1991）は不登校問題を考えるときに、自己受容という概念を用いている。梅原の考える自己受容概念に含まれる要素とは、①一方的な自己（存在）否定感に縛られていることから解放されること。②積極的に自分のよいところを認めること。③様々な良さや弱点を含んで「自分はかけがえのない自分なのだ」と思えること。④自分を固定的に捉えるのではなく、これからの自分の課題をも自覚するようになること、である。まさにこの4つの要素を含んでいる居場所が、この作品に登場してくる彼らにとっての部活動なのである。

（2）階層構造（ランク）に関しては、高校生自身が空気で感じるランクである。そこに対立関係があるわけではない。わかりやすくいえば「目立つ」と「地味」ということになる。しかし、「上」と「下」の階層構造が存在していても、そこには確かな隔りがあるわけではなく、きっかけさえあれば容易にその距離を縮めることができる。それは中学生とは違い、高校生が自己と向き合うことによって、初めて他人に目が行き、他人を認めることができるようになった心の成長があるからではないだろうか。ランクを超えたぎこちない接近が生じ、そこから自分と異なる価値観を持つ人間を見守るまなざしにつながる。これは（3）悩みとも関係する。青年期になり悩みを抱える心の状態に自分自身が適応してくる。むしろ悩みを抱えていることで、自分らしさを維持しているところもある。都丸・庄司（2008）は、悩みと距離感をとることで悩むことに積極的・肯定的になれるとしている。友人も悩み込みでつきあう。高校生の見て見ぬふりのなどこかクールな友人関係は、むしろ一人でいたい時もある彼らにとっては心地よいものかもしれない。

以上のことから考えると、教員による支援だけでなく、生徒による支援も、高校生ならば効果を期待できるかもしれない。支援する側の生徒の働きかけで、自分と向き合う場所を提供できるであろう。部活動とはまた違った居場所となる可能性が見える。

本研究は、現実の高校生の手記ではないので、実際に同じようなストーリーが展開されたとしても、その足元には様々な出来事が転がっているはずである。そして、解釈のしかたも、それぞれの生徒の外的・内的環境の影響を受ける。そこは本研究の限界である。また、テキストマイニングの活用に関しては、注目語情報や係り受け頻度解析も行ったが、対象となるテキストが現代高校生の口語文であることから、主語がなかったり、文章の途中で言葉が途切れたり、その構造上解析しきれないところがあり、有意な結果が得られなかった。さらに今回初めてテキストマイニングのソフトを使用し、筆者自身の不慣れもあり、データを生かしきれなかった。このことに関しては、次回に向けてソフトの使い方をマスターする必要があることを感じた。

ここに登場する理想的で充実した学校生活を送る高校生の言動や心理を分析し、現実の高校生活と比較することで、何が大切なことなのかが見えてくる。それは、現実の高校生活を考える上で決して無駄ではないと思う。これらの結果を当初の目的である高校生の不登校支援に有機的に関連付け、今後は、実際に高校時代に不登校を経験し、その時に何をどのように感じていたのかを面談などを通して情報を集め、支援への糸口にしたいと思う。

参考文献

- エリクソン E. H. 仁科弥生訳 (1977) 幼児期と社会 I みすず書房
- 藤井恭子 (2009) 「使える」教育心理学 安齊順子・荷方邦夫 (編) 北樹出版 pp. 37-45
- 伊藤亜矢子 (2008) よくわかる教育心理学 中澤潤 (編) ミネルヴァ書房 pp. 132-133
- 川端直人 (1994) エリクソンの人格発達論 氏原寛他 (編) 心理臨床大事典 培風館 pp. 102-106
- 金明哲 (2009) テキストデータの統計科学入門 岩波書店
- 熊谷直樹 (2010) 教室に居場所が見つからない生徒とともに 教育, 5月号, 35-41
- 大田 堯 (1979) 現代社会と子どもの発達 岩波講座 子どもの発達と教育 1、岩波書店
- 岡本祐子 (1999) 自己同一性 氏原寛他 (編) カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房 pp. 5-7
- 都丸けい子・庄司一子 (2008) 青年期の悩み方とメンタルヘルスとの関連について 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 294
- 梅原利夫 (1991) 「登校拒否」問題から人間をとらえ直す (覚え書) 和光大学人文学部紀要 1990 年度別冊